

「男、突っ走る！」

第
115
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (25)	『オフィスツリーイン』代表
国枝 佐代子 (60)	『スリジェネ』総合プロデューサー
国枝 茉奈 (28)	佐代子の娘
北 まひる (23)	『スリジェネ』メンバー
石井 麗子 (26)	元『スリジェネ』メンバー
月島 藍那 (23)	元市民ミュージカルキャスト

1 南中学校・全景

2 同・昇降口

スーツ姿の雅也が入ってくる――廊下
を教師が通りかかる。雅也、それへ、

雅也「すみません。職業講話の打ち合わせに
来たんですが、一年F組担任の石井麗子先
生いらっしゃいますでしょうか」

教師「少々お待ちください」

と、職員室へ入っていく――待機して
いる雅也。

職員室から麗子が出てくる。

麗子「ご無沙汰してます、うちーさん」

雅也「レイコ姐……じゃなかった、麗子先生、
しばらくでした」

麗子「さあ、どうぞ」

3 同・一年F組教室

雅也と麗子が話している。

麗子「改めて、今回は職業講話のお引き受け

「いただいて、ありがとうございました」

雅也「いえいえ。麗子先生から連絡が来るなんて珍しいと思ってたんですよ。まさか、広告業界の話を中学生にしてほしいなんてご依頼が来るとは思いませんでした」

麗子「本来だったら、一年生の間に様々な業界の勉強をして、二年生には地元企業の方にご協力をいただいて、職場体験をする流れだったんです。でも、コロナのこともあって、今はそういう行事ごとも自粛するようになってしまいました。それで、学年主任の先生を中心にして、職場体験の代わりに、職業講話という形で、様々な職種の方に来ていただいて仕事の話をしていただこうということになったです。私は広告業界を担当することになったんですけど、いかにせん業界の伝手ありませんからね。どうしようかと思ったら、パツとうっちーさんが思い浮かんだんです」

雅也「ありがとうございます。じゃああれで

すね、子どもたちの前では『スリジェネ』の話はしないほうが良いですね」

麗子「そうしていただけると、ありがたいです。メンバーのみんな、元気にしてますか？」

雅也「レイコ姐さんが卒業した後、演劇祭やって、次の年度は春に朗読劇、夏にまたミュージカルをやって、秋には『神様が願うまで』っていう沖島友さんの原作小説をミュージカルにしたんです」

麗子「広報で見ました。メンバー以外にも、一般からキャストを募集されたそうですね」

雅也「ええ。あの演目が終わったタイミングで、一期生も二期生もみんななくなっちゃったんですよ。まあそれよりも前に、マイキーは演劇祭を機に卒業しましたし、とみーは就職先の配置が神奈川支社になって、夏のミュージカルを終えてすぐに神奈川に引っ越したんですよ。しかも今は、コウタと付き合ってた同棲もしてるんです」

麗子「やっぱりあの二人、付き合ってたんですね」

雅也「気づいてたんですか？」

麗子「多分付き合うんじゃないかって、大方察しはついてました」

雅也「さすがはレイコ姐さん。普段子どもたちを見てるだけあって、細かいところまで気づいてるんですね」

麗子「そんなことは」

雅也「ナオは声優になるって、春に養成所に行くために東京に行きました。まあみんな、それぞれで頑張ってるみたいですよ」

麗子「じゃあ、うちーさんだけは、そのままだ残ったんですね」

雅也「僕も実は、『神様が願うまで』でメンバーを辞めるつもりで、国枝さんにも話したんですよ。でも、『スリジェネ』がアカデミーって形で、週一の習い事に体制を変えたんですよ。この一月でちょうど一年になるんですけど」

麗子「そうだったんですか」

雅也「メンバーを辞めると言ったので、そのアカデミーにはかかわらないつもりだったんです。でも、『神様が願うまで』の打ち上げで、アカデミーをするって発表がされたとき、一緒に出演した小学生の子から、『うちーはやらないの？』って声をかけられたんです。年の離れた弟みたいに可愛がってた子からそんな風に言われたら、ふとこれからはこの子たちを見守る側になるうって思ったんです。それで結局残留して、相変わらず運営兼任でやっています」

麗子「じゃあ、アカデミーとして来てる子は、みんな小学生なんですか？」

雅也「小学生が大半で、中学生が二人、高校生が一人、僕を含めて社会人が三人というメンバーでやっています」

麗子「変わったんですね、『スリジエネ』も」
雅也「あ、ごめんなさい。職業講話の話、しなきやですね」

麗子「いえいえ。卒業してから、全然メンバーの子たちとも疎遠になってますから、近況が聞けて良かったです」

雅也「声をかけてくださったおかげです。それで職業講話なんですけど、ずっと話をするのもし聞いてる側はつまらないですよね」

麗子「職業講話が、五時間目と六時間目で前半後半という形で、メンバーを入れ替えてやるんです。なので、両方とも同じ内容でお話をしていただければと思います。ですが、午後の授業になると、普段でもそうなんですけど、ウトウトしたり眠っちゃう子もいるもんですから」

雅也「分かりますよ、その気持ちは。じゃあ、一回の講話の中で前半は業界の話をして、後半はワークショップをしましょう」

麗子「ありがとうございます。参加型だったら、子どもたちもできるかと思っています」

雅也「グループワークをしてもらいたいんですけど、机を向かい合わせにして、みんな

で話し合うことってできますか？ もしコロナの感染対策的にダメなら、別の方法を考えますけど」

麗子「大丈夫ですよ。授業でも、今はマスクをした状態で、グループワークやっていますから」

雅也「そうですか」

麗子「最初の業界のお話って、黒板使いますか？ それとも、パソコンにしますか？」

雅也「パソコンが使えるんですしたら」

麗子「分かりました。私のものを用意しますので、USBか何かでデータを持っていただければ、パソコンの画面をこのテレビ画面にそのまま映せますから」

雅也「それはありがたいです。実はここ数年、講師依頼も増えてきましたね。教材の用意となると難しく、パワポで資料作ってたんです。それを再利用して、資料は用意します」

麗子「生徒たちに配る資料って、何かありま

すか？」

雅也「ああ、そうですね。メモに使ってもらったり、グループワークに使う資料、あと僕のプロフィールをまとめたものを用意します」

麗子「ありがとうございます。事前にメールで送っていただければ、印刷して、先に生徒たちに配っておきます」

雅也「そうしていただけると、助かります」

麗子「グループワークは、どんなことするんですか？」

雅也「あるシチュエーションを想定して、広告提案をしてもらおうと思ってるんです」

麗子「広告提案？」

雅也「お店をどうやってPRするかっていう相談をグループで決めてもらって、二組ぐらい最後に発表してもらおうかと」

麗子「良いと思います。それなら、生徒たちも楽しんでできると思います。よろしくお願いします」

雅也「はい」

4 同・廊下く昇降口

雅也と麗子が歩いている。

雅也「この学校の雰囲気、すごく懐かしい気がしますね」

麗子「うちーさんは、どんな中学生だったんですか？」

雅也「クラスリーダーとか、部活の部長を当時からやっていました。うちは、漁師町の田舎の中学校でしょ。やんちゃな同級生も多くて、よく先生と生徒で取っ組み合いの喧嘩していましたからね」

麗子「そういえば、あの頃、海沿いの中学校には気をつけろって、私も学校で言われてました」

雅也「年代的にほぼ同じですもんね。その気をつけなきやいけない学校に、僕は通ってました」

麗子「よくグレませんでしたね」

雅也「悪いことに関しては、あまり影響を受けないタイプなんですよね、きつと。良いことは、どんどん影響されちゃうんですけどね」

と、昇降口までやってくる。

麗子「今日はお忙しい中、ありがとうございます
ました」

雅也「いえいえ、こちらこそ」

麗子「当日まで、何か分からないことがありましたら、遠慮なく言ってください」

雅也「分かりました。引き続きよろしく願いします」

麗子「よろしくお願いします」

雅也「では、失礼します」

麗子「失礼します」

と、スリッパから靴に履き替えて出ていく——一礼して見送る麗子。

5 木内家・事務所

雅也がパソコンで仕事をしている。

N 「職業講話が行われる一ヶ月の間、僕は準備に追われました。一方、十二月に入り、スリジエネアカデミーの運営会議が行われ、国枝さんから、年度末あるいは四月上旬を目途に、アカデミー始動からの一年のレッスンの成果を見せる発表会をしようと提案されました。早速レッスンでは、発表会のお知らせがなされ、普段のレッスン内容も発表会に合わせたものとなりました。演目は希望制で、歌、ダンス、演技と全部希望するメンバーもいれば、僕のように演技に特化するメンバーもいました。メンバー一同、発表会に向けて張り切っている様子が伺えました」

6 南中学校・全景（一ヶ月後）

N 「十二月下旬の冬休み直前、職業講話が開催されました」

7 同・一年F組教室

生徒たちがそれぞれ着席している――

雅也がパソコン画面を操作しながら講話をしている。傍らに麗子。

雅也「広告というのは、いろいろなものがあります。皆さんから事前にもらったアンケートを見て、びっくりしたんですが、大半の子が『YouTube』って書いてあったんです。これは決して間違えじゃありません。皆さん、普段動画見てるときに、動画の始めとか見てる途中でCMが流れますよね。あれも立派な広告なんです。スキップしたらそれまでですけど、そのCMを見て、何かを買ったりすると、広告の意義が出てきます。他にもね、広告って言うのはチラシやホームページ、パンフレットといろいろあります。また、今はデジタルサイネージというものもあります。デジタルサイネージってみんな、分かる？ 分かんないか。みんな、中央交流センターって行ったことあるかな？ あそこにさ、大きい映像が見れる画

面が置いてあるの分かる？（と頷く生徒たちを見て）あれがデジタルサイネージと言います。つまり映像で宣伝をするものことです。この便利なところは、ポスターと違って張り替える手間が省けます。こちらの電車だと、中吊り広告って電車の上にある広告あるよね。あれも立派な広告なんですけど、東京の電車だとまさにデジタルサイネージで、電車の中にある画面でCMとか画像を見せて宣伝をしています。あともう一つあるのが、DMです。DMって言うってもあれだよ、インスタとかツイッターのDMじゃないよ。あれはダイレクトメッセージでしょ。こっちのDMは、ダイレクトメールという意味です。よくお店屋さんとかで、誕生日が近づくと、ハガキが届くでしょ。このハガキ持っていくと何パーセント割引しますよ、とかね。あれです、あのハガキを業界ではDMと呼んでいます」

×

×

×

雅也「さあ、今からはグループワークを皆さんにやっていただきます。お題はこちらです。（とパソコンのスライド画面を見せると）『名古屋でカフェをオープンしようとしているAさん。Aさんのために、どんな広告を作ってPRをすることができますか。※今回は提案やアイデアの話し合いなので、予算のことは気にしないでOK』。これをみんなにやってもらいたいと思います。ただ、やるにあたって、一つこれを意識してください。（とスライド画面を見せて）はい、『ブレインストーミング』です。これはですね、人の意見を否定しないという、話し合いの中のルールの一つです。『これ良いよね』って意見をした人に対して、『いや、それはおかしいよ』とか『そんなのダメだよ』って言わないことです。『じやあ、それをもっとこうしたら良くなるよね』という風に、意見を否定せずに、その意見に対してもっと良くなる意見を言うって

ください。もちろん、そのまま違う意見を
出すのもOK。否定をしないこと、これを
しっかり念頭に置いて話し合ってください。
最後に二組ぐらい発表をしてもらいたいと
思いますので、話し合う前にリーダーを決
めて、リーダーが中心になって話し合いを
進めてください。あの時計で二時二十分ま
で時間を取りたいと思います。それでは、
よいスタート」

と、テーブルごとに中学生たちが話し
合いを始めていく——雅也と麗子が回
りながら見ていく。

麗子「結構盛り上がってますね」

雅也「こうしたほうが、みんなも飽きないと
思ってる」

麗子「生徒たちのことを考えていただいて、
ありがとうございます」

雅也「僕も同じ立場になったら、一時間近く
ずっと業界のことを話されても飽きると思
うんですよ。こうやって参加型にしたほう

が、印象にも残りますからね」

微笑み合う雅也と麗子。

N 「二回に渡る職業講話は、無事に成功をおさめ、中学生たちにとっても楽しい時間となったようです」

8 カフェ『レインボー』・全景

N 「クリスマスを直前に控えたある日、僕は国枝さんのカフェ『レインボー』で開催されたジャズライブに、まひると藍那と一緒に行ってきました」

9 同・店

クリスマスツリーが飾られている。
薄暗い雰囲気の中、ジャズ歌手が歌っており、後ろで楽器の演奏がされている――雅也、まひる、藍那、その他客たちが食事をしながら演奏を聞いている。厨房から演奏を見ている佐代子、茉奈、店員たち。

×

×

×

演奏終了後。食事をして談笑している
客たち——その中にいる雅也、まひる、

藍那。

まひる「今年の一年はあつという間でしたね。

コロナで振り回されて大変でしたけど」

雅也「本当だよ。コロナで時間が止まった

みたいだったよね、特に春は」

藍那「緊急事態宣言が出ましたからね」

まひる「藍那ちゃん、撮影会は順調？」

藍那「何とかね。たださ、私もそろそろ、ど

こかの事務所にもう一回入り直そうかなと

思ってる」

雅也「そうなの？」

藍那「うん。ポトレモデルだけじゃなくて、

広告物にも映るような仕事もしたいし」

まひる「良いと思う」

藍那「うちーさんこそ、事務所オープンし

たんなら、もっと仕事頑張らないといけな

いですね」

雅也「まあね。一人でやってるから、まずは体調を万全しないといけないし。冬場って乾燥するでしょ。まだまだコロナの感染者も多いから、俺たちも気を付けないとね」

まひる「本当そうですね。春には、私たち本番があるんですから」

藍那「本番？」

まひる「うん。まだ日付は決まってないんだけど、アカデミーの成果発表会をやることになったの」

藍那「ええ、すごい」

雅也「コロナになって、舞台公演も中止とか延期になったじゃん。結局今年一年、スリジェネアカデミーとしては、何の演目もできなくて基礎レッスンがずっと続いてたからね」

藍那「日付決まったら教えて。私、見に行く」

雅也「ぜひ来て」

まひる「藍那ちゃんの前での演技は、緊張しちゃうかも」

藍那「じっと見つめてあげるから」

まひる「やめてよ、恥ずかしい」

笑い合う一同。

10 同場所（夜・時間経過）

雅也、佐代子、茉奈、まひる、藍那、

店員たちが残っている。

佐代子「今日はありがとうね、来てくれて」

雅也「こちらこそ。ステキなライブでした」

茉奈「これから、定期的にこういうイベント

はやっついていこうと思ってるの。ぜひ来てね」

藍那「もちろんです」

まひる「あ、うちー、藍那ちゃん。せっか

くだから、ツリーの前で写真撮りましょう」

雅也「良いね」

藍那「撮ろう」

茉奈「私、撮ってあげる」

まひる「お願いします（とスマホを渡す）」

クリスマスツリーを背景に、雅也が中

心になり、両側に藍那とまひるが並ぶ。

佐代子「うちー、両手に花じゃん」

雅也「贅沢ですよね」

茉奈「撮るよ。はいチーズ」

と、ピースサインで写真に映る雅也、

まひる、藍那。

11 道（夜）

雅也、まひる、藍那が歩いている。

雅也「楽しかった」

まひる「コロナもあるけど、来年もまたこう

して三人で集まろうね」

藍那「うん」

談笑しながらいつまでも歩いていく三人。

N「コロナの襲来、緊急事態宣言など、大変

だった二〇二〇年はこうして年の瀬を迎え

たのでした」